

論文審査の結果の要旨および担当者

| | | |
|------|-------|---|
| 報告番号 | ※ 甲 第 | 号 |
|------|-------|---|

氏 名 大澤健司

論 文 題 目

情報社会における自己変革の可能性を求めて
——情報学的源泉としてのベンヤミン——

論文審査担当者

主 査 名古屋大学教授 戸田山和久

委 員 名古屋大学教授 安田 孝美

委 員 名古屋大学准教授 秋庭 史典

委 員 名古屋大学准教授 久木田水生

大澤健司氏の論文「情報社会における自己変革の可能性を求めて——情報学的源泉としてのベンヤミン——」は、高度情報化社会において情報の洪水に押し流されることなく、人々が自己を確立しそれを変革していくことはいかにして可能か、という問題意識の元で、20世紀前半に活躍したドイツのユダヤ系思想家ヴァルター・ベンヤミン（1892-1940）のテキストを精緻に読解し、そこに埋もれていた未来の情報社会についてのポジティブなヴィジョンを取り出そうとした論文である。

ベンヤミンは代表作『複製技術時代における芸術作品』に見るように、写真や映画など当時の先端的メディアに注目した思想家ではあったが、もちろん今日の高度に発展した情報技術とそれによる社会の変化は知る由もなかった。そこで、大澤氏は、ベンヤミンのテキスト読解から、まず「ベンヤミンの方法」を取り出す。そしてその「方法」をベンヤミンのテキスト自体に当てはめることによって、そのテキストに潜在し明示的には書かれなかった「ベンヤミンの情報論」を明確化し、それを今日的な観点から展開することで、情報化社会における自己変革の可能性とその方法という問題に答えようとする。

第I章「方針と方法を巡って」では、ベンヤミンが画家パウル・クレーの絵画作品「新しい天使」とユートピアについて論じた晦渋なパッセージを精緻に読み解くことから、ベンヤミンの特徴的な方法論を取り出す。それは、過去の痕跡を用い、そこに眠っている実現しなかった可能性の歴史を見出し、それを現在と出会わせ、次なるもののイメージを描き出す、というものである。

第II章「ベンヤミンにおける情報論—物語、長編小説、情報—」では、前章で取り出した方法論をベンヤミンのテキストに適用し、思考断片からベンヤミンに潜在する情報論を再構築している。

第III章「探偵小説とその視角—探偵小説から捉える情報—」では、第II章で再構築された「ベンヤミンの情報論」を現代の情報社会の状況と結びつけることが試みられる。そのために、大澤氏は当時流行した探偵小説論を援用し、「残された痕跡」を過去の真実の正確な再現という執着から離脱し、むしろ過去の豊かな潜在的可能性を開くものとして捉え直す。

第IV章「他なるものとしての自己を読む—一つのイメージについて—」は、以上の考察の成果を情報化社会における自己変革という目標に結びつける。そこでは、情報化社会が自己について膨大な痕跡が蓄積される社会であることを逆手に取り、その痕跡との対話から、自己の実現しなかった可能性を見出すという自己変革の契機が指摘される。

結章「おわりに—まとめと展望—」では、本論文での成果がまとめられるとともに、哲学的思索が情報学にいかなる寄与をもたらしうるかが論じられている。

以上、本論文は、一世紀近く前に書かれたベンヤミンのテキストに現代的観点から光を当て、その潜在的可能性を引き出しつつ批判的に評価するという思想史上の独自貢献に加え、それをもとに高度情報化社会に生きる人間の自己変革の道筋を描くポジティブな情報社会論を提案しており、情報学の発展すべき方向性について重要な示唆を与えている。よって本論文提出者、大澤健司氏は博士（情報科学）の学位を受けるにふさわしいと判断した。